

氏名(本籍)	岡部 晋典
学位の種類	博士(図書館情報学)
学位記番号	博乙第 2749 号
学位授与年月日	平成 27 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	図書館情報メディア研究科
学位論文題目	K. R. Popper と図書館情報学-反証可能性、開かれた社会、客観的知識-

主査	筑波大学	教授	博士(比較社会文化)	後藤 嘉宏
副査	筑波大学	教授	博士(学術)	中山 伸一
副査	筑波大学	教授	文学修士	逸村 裕
副査	筑波大学	教授	博士(文学)	綿拔 豊昭
副査	筑波大学	教授	社会学修士	仲田 誠

論文の要旨 (2,000 字程度)

本論文では科学哲学者 Karl Raimund Popper (1902-1994) の提唱した諸理論と図書館情報学のかかわりについて論じられている。1980 年代において、図書館情報学は「客観的知識論」を自らの基礎理論として定位させようという試みがなされてきた。客観的知識論とは、物理的世界と主観的世界の二つの世界に加えて、「記録物によって成立する世界」を追加したものである。本論文は、1980 年代の研究をきっかけとして、Popper の哲学がどのように図書館情報学に資するのかを捉えた研究である。本論文は五章から構成されている。以下、論文の構成に従い、内容を要約、解説する。

第一章は本論文の導入である。著者は、「客観的知識論」に対する再評価を試みるという問題意識のもと、この観点から、本論文の意義と目的を論じる。1980 年代における図書館情報学の研究は、Popper の客観的知識論を、他の Popper の哲学との連関を見落として研究を行っていたことを指摘し、その連関を押さえることの必要性を指摘している。また、1980 年代と現代では社会的背景が異なっているがゆえに発生した、現代の図書館情報学の諸問題について、Popper の議論によってそれを分析する必要性が論じられる。

第二章では、Popper の議論を Popper のテキストそのものから捉え直す作業が行われる。Popper 後期の議論である客観的知識論は、Popper の提唱した他の二つの主要概念、「反証可能性」、「開かれた社会」との関連性がなく、断絶を感じさせるものであると Popper 研究者たちから論じられてきたが、本論文では客観的知識論のテキストを丹念に読み直し、客観的知識の「自律性」からは「反証可能性」の概念が、客観的知識論の「相互作用」からは「開かれた社会」の概念がそれぞれ関連していることを示している。また、同時に哲学の領域で行われてきた客観的知識論に対する批判を、Popper のテキストから回避した上で、1980 年代に行われた図書館情報学の研究の批判的乗り越えを行っている。これらの作業の上で、客観的知識論と反証可能性が接合することにより、「記録された知識が棄却されるというこ

とはどのようなことか」、客観的知識論と開かれた社会が接合することにより、「記録された知識が伝達されることによって社会にはどのようなことが起こるのか」という議論が可能であることが示される。このことから、記録物とは何かという議論ではなく、記録物はどのように機能するのかという議論の視座が導出される。また、客観的知識論には知識の棄却と伝達の二重性があることが論じられる。Popper

第三章では、反証可能性と客観的知識論に基づいた、図書館情報学のコレクション形成、蔵書構成論の問題が議論される。具体的には、図書館において疑似科学図書はどのように取り扱われるのかという議論が行われる。疑似科学と科学の境界設定として Popper の反証可能性が用いられることが多い。本章でも Popper の反証可能性を、客観的知識論で論じられる記録物と絡めて、本章で扱う対象の分析視座として用いている。本章における研究手法は聞き取り調査を用いており、大規模図書館と小規模図書館を分析軸として、どのように疑似科学図書を各規模の図書館が取り扱っているかを丹念に聞き取っている。本章では反証可能性の概念そのものは図書館の現場において直接的に利活用されていないものの、疑似科学図書が科学の棚に配置されることに対し、司書個人の良識や社会的経験に照らした批判が加えられ、分類番号の振りなおしによって科学の領域から科学ではない領域の図書として棄却されていく姿を反証可能性と客観的知識論に基づき描き出している。また、図書館において公平中立な蔵書構成を目的としつつも、その目的を達成していく上で直面する困難、例えば図書館では持ちたくない本であっても、リクエスト等のあった本は、相互貸借や閉架収蔵というかたちで取り扱うといった、図書館における公平中立性という目標と蔵書の価値評価との齟齬が、本章では丹念に描き出される。

第四章では、開かれた社会と客観的知識論に基づいた、学術情報流通論の現在のトピックであるオープンアクセス運動が扱われる。オープンアクセス運動は現代の図書館情報学の大きなイシューであるが、開かれた社会を実現させるために、Popper に私淑する投資家 G. ソロスが巨大な資金投下を行っているにもかかわらず、オープンアクセス運動のプレイヤーらはその思想について言及していないことを計量書誌学的調査によって論じている。ここでは、Popper は、記録された知識を媒介に討議することによって社会が漸進することを、アテナイの書物市場やグーテンベルクの活版印刷を例にして議論していることを示し、それと構造の同一なものとして、現代のオープンアクセス運動が行われていることが論じられる。

第五章はまとめの章にあたる。1980年代において行われた図書館情報学の研究とはまた違った形で Popper の哲学が現代の図書館情報学でも依然として有益であることが論じられる。また、本研究の今後の課題について議論される。

以上のように、本論文は Popper の客観的知識論を研究の契機としつつ、Popper の哲学を統合的に捉え直すことにより、図書館情報学に対して Popper の哲学がどのように裨益するのか、哲学的な理論研究の面、また情報サービスの実態調査の面、双方から明らかにした研究である。

審 査 の 要 旨 (2,000 字以上)

【批評】

本論文は、科学哲学者、Karl Raimund Popper と図書館情報学のかかわりについて、Popper の哲学が図書館情報学にどのように裨益するのかを論じた論文である。本論文は文献調査を主体とするが、必要に応じ、聞き取り調査や計量書誌学的手法を用いるなど、必要に応じ適切な研究手法を用いている。

まず、本学位論文全体を通じて高く評価しうる点を二点取り上げる。

1. 1980 年代の図書館情報学において研究が行われたものの、その後、時代の変遷とともに言及されなくなった、Popper の客観的知識論を、約 30 年ぶりに現代に蘇らせ、図書館情報学の扱う対象である「記録物」に対して思想・哲学的な検討を加えたことは高く評価しうる。また、1980 年代当時図書館情報学では見落とされていた諸概念を補足することで、Popper の客観的知識論の現代的意義を再度論じている。歴史的に埋もれつつある議論を掘り起こし、再度光を当てた本論文は、図書館情報学への学問的な貢献をなすものであり意義が大きい。
2. Popper 研究者は、Popper 前期と Popper 後期とは断絶を感じさせると論じてきたが、本論文では客観的知識論、反証可能性、開かれた社会の三つの理論を統合的に捉え直し、その断絶を埋めることに成功している。著者は Popper 研究そのものには踏み込んでいないと本文中において断っているものの、「記録物」という視点から Popper の前期と後期を統合しており、Popper 研究としても新規性、意義のあるものとして本研究は評価しうる。

また、以下では各章の内容について高く評価しうる点、三つを取り上げる。

1. 第二章において、過去の図書館情報学で行われた研究を丹念に掘り起こした上で、Popper の哲学の全体像から客観的知識論を捉えることに成功している。前述のように、客観的知識論と反証可能性、開かれた社会の概念が連続していることを、Popper のテキストを丹念に読み込むことによって、明快に論じていることは評価できる。
2. 第三章で取り扱われている、疑似科学図書が図書館においてどのような取り扱いを受けているかという、現代的な問題に対して通説的な考え方とは違った実態を聞き取り調査で炙り出すことに成功している。蔵書構成論の領域に、Popper の反証可能性の概念を手がかりに正面から切り込んでいく。従来の蔵書構成論で議論されていた、要求論・価値論という二項対立の構図を紹介しつつ、反証可能性を踏まえ、人文社会的知識と自然科学的知識との知識の特性の差に着目することで、新たな蔵書構成についての議論をめざし、二項対立の乗り越えを行ったことは評価できる。また、疑似科学が社会問題になっているなかで、知識の蓄積機関としての図書館が資料の全面的（中立的）提供と資料の質的担保の板挟みのなかで、どのように双方の要求をかなえるべく振舞っているかを描き出した点も評価しうる。
3. 第四章では Popper の「開かれた社会」に着目し、かつ彼の客観的知識論の論じる記録物が伝達する意義について、オープンアクセス運動を事例として論じ Popper、オープンアクセス運動はその運動の個々の事象にのみ言及されることが多いものの、Popper に由来するその思想的な意図や意義を適切に捉えており、従来のオープンアクセス研究に比較して巨視的な観点からの議論に成功している。このことによって、オープンアクセス運動は情報学内部のみの事象ではなく、より学術コミュニティ全般にかかわる広範囲な現象として捉えうることを論じており、本章の射程距離を広いものとしていることは評価できる。

以上のように、過去の議論に再度光をあて、それらの議論の元となった研究の現代的な意義を問いか

けつつ蘇らせている本論文は、学術的に十二分に意義あるものとして高く評価しうる。

ただし、本研究はいくつかの問題点も存在し、以下の三点が指摘できる。

1. **Popper** 研究として、客観的知識論、反証可能性、開かれた社会を統合的にとらえてはいるものの、反証可能性や開かれた社会に対しては、批判的な検討は加えられていないし、これら以外の **Popper** の概念に対する目配りが不足している。また、**Popper** は多くの論争を行っている哲学者であるが、例えばその論争相手との議論を丹念に辿ることにより、より **Popper** 研究としてさらに重層的かつ立体的な深みが得られる可能性はある。
2. **Popper** の諸概念を用いて図書館情報学的な課題の実態を分析しようとする意欲は高く買えるものの、哲学的議論の実態への適用に際し、強引なところが一部見受けられ、理論と現実との結びつきの必然性がやや希薄であるとの印象を与える箇所が散見した。したがって、このような論の運びの飛躍を埋めるべく、**Popper** 研究の哲学的研究を深めると同時に、**Popper** の枠組みで捉えきれない現実をしっかりと把握し、理論面と実証面双方から、**Popper** 理論を基礎にした、**Popper** 理論の発展的な乗り越えを図ることが望まれる。
3. **Popper** には人文社会科学と自然科学とを分離して捉える発言と、双方を統合的に捉える発言とがあるし、プラトンを強く否定する発言と肯定的に捉え自らをプラトニストであると規定する発言とがある、等、発言に揺らぎのある人物である。本論文においてもこれらの揺らぎは指摘しているものの、この揺らぎを十二分に捉えきった **Popper** 理論の分析、あるいは揺らぎを活かした形での現実の図書館情報学的な課題への分析がなされているとは言い難い。

しかし、本論文は哲学の論文ではなく哲学をベースにした図書館情報学の論文であるという性質に鑑みると、以上の問題点は本論文の著者に今回求められた枠を越えた問題であるといえる。今後は図書館情報学と哲学双方の学際研究として、いずれの領域においても研究の発展の可能性の芽を伸ばしていくことで、これらの弱点を乗り越え、新たな独自の理論を構築していくことが大いに期待される。

本学位論文の著者は、多様な問題に対して幅広く巨視的な視野をもちつつ、図書館情報学における **Popper** の研究を行っている。哲学・思想史上の一齣という狭く地道な領域への問題意識を常に保ちつつ、図書館や情報を巡る現代的な問題にも関心を示しながら、理論と現実との往復運動を意識して研究を行っている著者は、情報の基礎理論とその応用にかかわる領域を将来牽引していく可能性が高いと思われる、その片鱗をしっかりと覗かせている本論文は学位論文として高く評価することができる。

【学力の確認結果】

平成 27 年 1 月 21 日に、図書館情報メディア研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。引き続き、「図書館情報メディア研究科博士後期課程（論文博士）の学位論文審査に関する内規」第 2 3 項第 3 号に基づく学力の確認を行い、審議の結果、審査委員会全員一致で合格と判定された。

【結論】

よって、本学位論文の著者は博士（図書館情報学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認められる。